

# 山川菊栄記念会 \* 資料部情報

no. 5, 2025年4月

---

## 『明星』掲載のドーデ著・青山菊栄訳「月曜物語」について ～平和主義、人道主義の原点を考察しながら

山口順子(山川菊栄記念会、オノーレ情報文化研究所)

---

### 要旨

東京府立第二高等女学校卒業後、馬場孤蝶に師事するなかでの翻訳として、これまでの著作目録にはない青山菊栄の作品が確認された。ドーデ「月曜物語」からの普仏戦争下の家族の悲劇の物語、2つの小品であるが、その選択理由について馬場の英語からの和訳指導過程に沿って解き明かした。また同時に、多感な時期に体験した、縁者や親戚の戦死と家族の悲しみや、姉・松栄の平和主義からの影響が背景にあることを考察した。この作品は、山川菊栄が終生貫いた平和主義、人道主義の出発点に位置づけられる。なお、文中の敬称はすべて省いて記述した。

### キーワード

青山菊栄、『明星』、ドーデ、「月曜物語」翻訳、馬場孤蝶、人道主義、平和主義

---

### ○ 山口順子

この作品は [クリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンス](#)の下に提供されています。

引用するときは次の形式でお願いします。

山口順子「『明星』掲載のドーデ著・青山菊栄訳「月曜物語」について～平和主義、人道主義の原点を考察しながら」『山川菊栄記念会\*資料部情報』no. 5、2025年4月（山川菊栄記念会サイト [h](https://yamakawakikue.org/) [tps://yamakawakikue.org/](https://yamakawakikue.org/) 内），閲覧年月日

## 『明星』掲載のドーデ著・青山菊栄訳「月曜物語」について ～平和主義、人道主義の原点を考察しながら

山口順子(山川菊栄記念会、オノーレ情報文化研究所)

まるで古い革の葉のような、干からびた細長い紙片が山川菊栄文庫資料のなかから現れた。それは馬場孤蝶著『明治文壇の人々』(三田文学刊行会、1943年)の紙の外箱の背だけであって、肝心の書籍自体は山川菊栄文庫には収録されてはいない。

馬場が、菊栄の入門から山川均との結婚の媒酌人まで引き受けた一部始終を書いていたのは、これより早く、1936(昭和11)年刊行の『明治文壇回顧』で「山川菊栄女史」という一章を設けている。この初出は、大日本雄弁会講談社が発刊した総合雑誌『雄弁』(1919年4月号)に「女権思想の黎明期」でデビューした、山川菊栄紹介記事であり、愛弟子を男性中心の論壇に送り出すはなむけの言葉でもあった。この本では「明治時代の閨秀作家」という別の章もあり、そこでは明治22年頃からの記憶にある女性作家の名をあげつつも、主題は樋口一葉となっており、『一葉全集』を中心に馬場自身とのかかわりに多くを割いている。そして馬場の逝去後、編まれたのが『明治文壇の人々』となる。こうしてみると、馬場が明治期の女性作家として特筆したのは、一葉そして菊栄ということになるだろう。

一方、菊栄は、随筆雑誌『博浪抄』に掲載された追悼文のなかで馬場の亡くなる直前を見舞ったときのことを書いた。そのとき、収監中の山川均が理解できないという理由で、江戸時代の川柳本を一旦馬場に返そうとしたところ、「意味がわからないところがよい」とやや強引に渡されたエピソードにも触れた。この見舞いの直後、馬場宛に書いた菊栄の書簡<sup>1</sup>が最後になったことから師弟関係がずっと続いていたことがわかる。

菊栄が明治100年の時期に出された共著『明治維新のころ』(朝日新聞社、1968年11月)<sup>2</sup>で「攘夷をめぐる水戸藩の苦悶」を書いたとき、巻末の筆者紹介欄は次のようなものだった。

明治二十三年生れ。大正元年津田塾大を卒業。馬場孤蝶のもとで社会問題、女子労働問題の指導を受け、以来女性解放運動に終始。戦後二十二年から二十六年まで労働省婦人少年局長。社会運動家山川均氏未亡人。著書に「武家の女性」「女二代の記」など。

菊栄自身が目を通していたことは疑いようがない紹介文であり、馬場の指導によって「社会問題、女子労働問題」に開眼していったと自認していたことがわかる。

---

<sup>1</sup> 1940(昭和15)年5月13日発、山川菊栄筆馬場孤蝶宛の書簡(日本近代文学館蔵、『日本近代文学館年誌』12、2018年所収)。この書簡について山田敬子氏に御示教を得たことに感謝申し上げます。

<sup>2</sup> 初出は『朝日新聞』連載で、「天皇の世紀」執筆中の大佛次郎が病気のため、代わりに数名の連載企画があり、山川菊栄が冒頭から執筆担当の機会を得たもの。山口順子『山川菊栄文庫資料』(神奈川県立図書館蔵)のうち青山延寿出版関係史料概要について「Web site: (維新政権期の木版刊行物に関する学際的研究およびオープンサイエンスの推進サイト内公開論文)<https://sites.google.com/view/ishin-mokuhan/top/report2>内、補論『覚書 幕末の水戸藩』への道程」。

だが、菊栄の恩師である馬場について、そして二人の師弟関係についてはこれまで言及されたとしてもごく表面的な記述に終わっていた。その理由として息子の山川振作氏が作成した年譜(『山川菊栄集』(岩波書店、1982年)の第1巻における記載が簡単な箇条書きで始まっていたことも遠因しているように思う。鈴木裕子氏や伊藤セツ氏による近年の研究<sup>3</sup>でも馬場による具体的な指導については、『おんな二代の記』や『二十世紀をあゆむ』の記述以上は書かれていない。

本稿では、これまで深く掘り下げてこられなかった菊栄の文学修業について、著作目録の最初に掲示されてきた、ウラジミール・コロレンコ著「マカールの夢」『番紅花』(1914年4月号所収)より以前<sup>4</sup>に位置づけられる作品として確認できた、『明星』掲載の梗概翻訳を紹介する。そして、この作品を選択して翻訳にいたった背景について馬場孤蝶の指導内容だけでなく、そこに至るまでの家庭内の情報環境についても、若干の考察を加えていく。なお、筆者の専門はメディア史であり近代文学は専門外であることをお断りしておきたい。

## ○英文学者馬場孤蝶への師事

馬場孤蝶は、菊栄との出会いを、飯田町の中坂を降りたところにあったユニバーサリスト教会で開催されていた閩秀文学会であったとしている。麹町四番町に生まれ暮らしていた菊栄は、東京府立第二高等女学校卒業後、自活のため教職をめざして国語伝習所に通学を始める。しかしすでに古典に精通していた菊栄はその授業内容に飽きたらず、近所のこの教会で開催されていた成美女学校という英語教室も通学先とした。さらに同じ教会で始まった閩秀文学会にも足を運んで、意欲的に学習を継続しながら将来の模索を始めていた。

閩秀文学会が数か月で終わってしまった1907年(明治40年)の秋ころ、講師であった与謝野晶子が菊栄ほか1, 2名を牛込弁天町の馬場の自宅に連れてきて、個人教授を依頼した、と馬場は記憶する(前掲『明治文壇回顧』)。一方、菊栄は馬場から葉書がきたと『おんな二代の記』に記しており、若干の食い違いがみられる。

いずれにしても馬場は学習継続意欲のある女性たちを受け入れ、菊栄のほか、大貫かの子(のちの岡本かの子)、小野美智子、平塚明子(らいてう)が自宅通学生となった。このうち、平塚はすでに日本女子大学を卒業しており、閩秀文学会でも回覧雑誌で自身の小説を披露しながら、菊栄にも寄稿を求めている。菊栄が、「回覧雑誌」というメディアを主体的に創造する行動的な女性の姿をみたのはらいてうが初めてだったと思われる。女学校時代に三宅やす子とある雑誌<sup>5</sup>への投稿経験があったものの、自分から雑誌をつくるまでには至っていなかった。菊栄はらいてうの回覧雑誌で自宅の競売経験について書いたという。それは、父・森田龍之助が事業に失敗したことを起因するものだったが、重なる差し押さえや競売処分のため、暮れになって質屋の着物が流され正月には着物ひと

<sup>3</sup> 鈴木裕子編「年譜」『新装増補山川菊栄集 評論篇別巻』(岩波書店、2012年)、伊藤セツ『山加菊栄研究』(ドメス出版、2018年)、鈴木裕子『山川菊栄』(梨の木舎、2022年)。ただし、伊藤氏は家族関係や読書内容などの菊栄をめぐる情報環境について、本文、年譜共に丁寧に追っている。

<sup>4</sup> これまでの著作目録は、岡部雅子作成「山川菊栄著作目録」『山川菊栄の航跡 「私の運動史」と著作目録』所収(ドメス出版、1979年)。これを増補した、鈴木裕子編『新装増補 山川菊栄集評論篇』別巻所収(岩波書店、2012年)。

なお、目録になかった評論作品については雑誌『青年』(1915年12月号)掲載の青山菊栄筆「ひとり者の抗議」が森田成也氏によって確認されている(森田氏発表資料「買春を考える会」学習会(2024年9月14日)における発表「戦前における山川菊栄の廃娼論の意義とその限界」資料内)『青鞥』や『番紅花』の『青年』誌広告欄でもこの評論タイトルは容易に見出すことができる。

<sup>5</sup> 投稿した雑誌については判明していない。

つないこともあったという<sup>6</sup>。馬場がみた彼女の第一印象が思いつめたような暗い印象だったことから、森田家の没落と困窮が原因であったことは想像にかたくない。まずは国語教師として自活の道をめざしたものの、求める水準の授業内容を得られず、進むべき道への模索が始まっていたことも示唆している。菊栄の学習は学校内にとどまらず、近所に開館した大橋図書館で、国語の教科書に掲載された随筆に触発され『一葉全集』を読破していた(『おんな二代の記』)。また同居人で父方の遠戚である小川卯太郎から譲り受けた古典文学の全集や、姉が和歌を学んでいた関係で得られた書籍の数々<sup>7</sup>を摂取しており、平塚らいてうが驚くほどの知的蓄積を有していた。

そうした菊栄が、馬場の元で英語を学ぶことを希望した。国文から英語への変更は、姉松栄が第二高女、女子英学塾へと進み、英語教師へと自立していく女性のモデルとして機能したこともあろう。もともと、松江藩の小心者の宮次家次男に生まれた父・龍之助は、お鷹師の下で鷹のえさとなる雀をとる鳥刺しの家、森田家の養子となり、足軽として戊辰戦争に参加した。その帰還後に横浜語学所で学び、陸軍士官学校のフランス語通訳職の傍ら、フランス人から動物学を、また農商務省の役人から家畜の飼育方法や獣肉罐詰の製造法を学んだという。やがて陸軍を離れてから、千葉県令船橋衛のもとで養豚についての農業技術指導にあたっているなか、『塩豚製造法』を著わしていた。そして1887(明治20)年船橋の洋行に随行して、欧米で養豚と食肉加工技術についてさらに研鑽を積み<sup>8</sup>、帰国後再び陸軍技師として技術普及に務め、『養豚新説』で「豚博士」の異名をとるほどであった。母千世も中村正直の同人社就学と同時にカナダ人の牧師カクラン夫人から英語を学び、また夫の龍之助からフランス語を学んでおり二人は洋服にすすんで暮らしてハイカラなものと評判をとるほど欧化主義に順応した、国際派の夫婦だった(『おんな二代の記』。姉や兄の進路にあたって親の干渉がない家庭環境を背景として、兄はドイツ文学を専攻し、菊栄は馬場のもとで英語を選択したのだった。

そのおよそ8か月後学習成果について公に披露することになる。それが与謝野晶子の『明星』誌上に現れるのは、馬場が『明星』にすでに関係し自身の翻訳作品を発表していたからである<sup>9</sup>。

## ○菊栄によるドーデの「月曜物語」梗概紹介

『明星』(1908年)に青山菊栄の翻訳があることは、これまで発表された山川菊栄の著作目録には記載されていない。しかし、戦前の岡野他家夫著『明治文学研究文献総覧』(富山房、1944年、p461)にすでに掲載されていた<sup>10</sup>。見逃されてきた理由は、菊栄の業績が女性解放思想史やジェンダー史の分野で論じられてきたことも遠因しているように思う。そもそも、鋭利な批評眼をもつ評論家として文筆業を職業にし、戦前は日本文芸家協会にも所属していたことを踏まえれば、文学史からの探求があってもおかしくはなかった<sup>11</sup>。そして、翻訳家、文筆家としての彼女の土台の養成プロセスに

<sup>6</sup> 菊栄の談話として「幕末の水戸学者の長女」(『わが母を語る』内、家庭新聞社出版部、昭和16、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1043069> (参照 2025-03-04)。

<sup>7</sup> 「文庫資料」中にはその一端と思われる「保元物語・平治物語」(日本文学全書第29編、博文館)が入っている。また、松栄が入門し和歌を教わっていた井上通泰(南天荘、柳田国男の兄)の「南天荘年報」(松栄子の揮毫あり)も「文庫資料」に含まれる。

<sup>8</sup> 山川菊栄は父の洋行について「留学」ということばを使うことがあるが、船橋衛の通訳随員のかたわら技術研修を受けたのであり、正規の留学ではない。

<sup>9</sup> 木戸昭平『馬場孤蝶』(高知市民図書館、1985年)p139。ここでは、1902(明治35)年、ドーデ「夏の夜」、ゴーリキー「秋の一夜」、モーパッサン「ふながかり」があげられている。

<sup>10</sup> 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1127334> (参照 2025-02-11)。

<sup>11</sup> 菊栄の文学作品としては、雑誌『種蒔く人』に発表し発禁となった創作「石炭がら」があるが、「梗概」と本人が末尾に書いており完全作品ではない。また、翻訳の仕事も「山川菊栄の翻訳文献一覧一原著とその作者に山川菊栄記念会 \* 資料部情報 no. 5, 2025年4月

着目することは、思想形成とも密接にかかわってくると思われる。さて、掲載号である『明星』申歳第四号は1908年(明治41)年4月1日の発行である<sup>12</sup>。2段組の目次のうち、上段には長原止水や橋口五葉の絵画や図案、森林太郎の小説や山川登美子の短歌、馬場孤蝶の小説梗概、戸張孤雁の評論といった、文学者と美術家の垣根を越えた作品が並んでいる。下段の八人目に青山菊栄の名がみえ「月曜物語」(小品)と記されている。そして18歳にまだ満たない菊栄は、次のことばで『明星』誌上に登場した。

『月曜物語』はドオデの作で、重に普仏戦争中の物語を集めたものである。ここには、そのなかから二つだけ抄訳して見た。抄訳であるから、ほんの話の筋だけである。読むお方は、何うぞ、そのお積りで、居て頂きたい。

「ほんの話の筋だけ」というドオデの2作は、「少年間諜」と「母の心」で、93頁下段から102頁の上段までに掲載されている。「最後の授業」で日本人にも親しみのある『月曜物語』だが、もともとアルフォンソ・ドオデが毎週月曜日に書いていた普仏戦争下の悲哀をテーマにした短編41作品を集めた1冊で、『月曜物語』(Contes du Lundi, 英訳タイトル:Monday Tales)として1873年に刊行された。マリアン・マッキンタイア(Marian McIntyre)による英訳は1890年にリトルブラウン社から初版刊行となっている。1番最初の作品は「最後の授業」で、菊栄が訳した二作は『月曜物語』英語版<sup>13</sup>でも4番目と5番目に並んでおり、戦時下の親子の悲劇を鮮やかに切り取って示している。

短編「少年間諜」のあらすじだが、主人公のステヌは、元海軍の軍人でいまは公園管理人として子供たちにも人気のある、男親に育てられている。普仏戦争の 파리 包囲下、生活に窮していると、ステヌはある若者に敵方のプロシア軍兵士たちに新聞を売りに行く仕事に誘われる。包囲を潜り抜けながらちょっとした危ない目にも会いながら二人の仕事はうまく運ぶのだが、若者はフランス軍の狙撃作戦を敵にこっそり伝えてしまう。ステヌはそのスパイ行為の不正に堪え切れず、帰宅後父親に一部始終を話す。そして父親はステヌが得た銀貨をとりあげると、すぐに従軍していき、そのまま帰宅することはなかったというものである。

もう一作の「母の心」については、原題は「les meres」(母たち)のところ、「心」をつけているのは、母親の心情を強調してタイトルをつけたからだと考えられる。主人公の母はセーヌ大隊に従軍している歩兵の息子に会いたい、その一心で、手を尽くして面会の手続きをし、父親とともに早朝の駐屯地ヴェネリアン山のふもとを訪ねる。やっとのことで背の高い美しい息子と合い抱擁し接吻する。しかし母親が息子を見つめた途端にラッパが鳴り響く。堡壘のうえで24時間の見張りをしなければならぬ、と、息子は用意してきた朝食をともにせずその場を立ち去ろうとする。せめて食事を少しでももたせようと考え、持ち物の中を両親は探しだそうとする。このあとの菊栄訳を抜き出してみると

---

みる国際性『山川菊栄記念会\*資料部情報extra1』([https://yamakawakikue.org/archives\\_info](https://yamakawakikue.org/archives_info)内)で示したように多数あるが、完訳本は代表作ベーベル著『婦人論』以外少ない。

<sup>12</sup> 以下引用は復刻版『明星』(臨川書店、1979年)によった。

<sup>13</sup> ドオデによる初版は1873年、改訂新版は1876年のシャルパンティエ社。英語版は1900年にリトルブラウン社からマリアン・マッキンタイアの翻訳で出版された。「少年間諜」の原題はL'Enfant espion(英訳タイトルThe Boy Spy)、「母の心」の原題は「les meres」(母たち)、英訳「The Mother」。(The Works of Alphonse Daudet: Monday tales; tr. by Marian McIntyre, Little, Brown, 1900)<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=hvd.32044019785419&seq=33>(2025年1月30日閲覧参照)

で、二人の年寄は速く息子にやりたいとあわてるので箱がなかなか見つからぬ。しまひには涙を含むだ声で、

『箱は何處だ、箱は、箱は。』

と無闇矢鱈にあせるばかり。

漸つと箱が出て来た。息子は受け取つて両親と長く抱き合つた後、城の中へ走せ返つた。

朝食、ああその為めには長い時間を費して、母親は昨夜も眠らなかつたのに、しかも終に遂げられなかつた。此の空に歸した旅以上に人の胸を盈ぐるのがほかにあらうか。彼等に取りつては實にこがれこがれた樂園の隅がちらとほのめいたきりで門が閉ぢられたにひとしいのである。二人ともしばらくはじつとして立つたままであった。

やがて男は身をふるはせ、気を取り直した風で、咳拂ひをした後、決心した聲で、

『さつ帰らうぢやないか。』と促した。しかし其顔は死人のやうである。

母親は體(からだ)へ腕を確(しか)とつけ、男の傍により添うてとぼとぼとゆく。はるか帰つた後も、その狭い肩でショオルのぶるぶるとふるふのが見えた。

このようにやや硬さはあるものの言文一致体で書かれた梗概によって、二作ともに普仏戦争に翻弄される家族の悲劇を描くもので、それが彼女の作品選択理由でもあったと思われる。

日本へのドーデ作品の移入状況は『明治翻訳全集』に詳しく、馬場孤蝶の翻訳歴も整理されているが、ドーデ作「夏の夜」の馬場孤蝶による翻訳が1902(明治35)年の『明星』に掲載されてから6年後、すでに顧問格であった馬場がそこに菊栄作品を推薦していった、とみて間違いあるまい。それは、馬場に菊栄の指導を依頼した与謝野晶子へのある種の成績報告でもあり、先述のように一葉の後継と見定め、菊栄の文才を見抜いてその背を文壇へと押し出したのであった。

## ○自然主義文学との出会いそして翻訳の修行

### (1)なぜフランスの自然主義作家ドーデの作品を選んだのか

まず、ドーデを訳した理由は、馬場孤蝶がその後に著わした、『社会的近代文芸』(東雲堂書店、大正4年)<sup>14</sup>に見出すことができる。英文学翻訳入門ともいえる、そのなかの「外国文学研究法」という章では、英語学習の簡便な方法の一つとして、大陸文学の面白い小説で英訳になっているものを勧めている。英国の小説よりも欧州大陸の言語では、難解な言い回しが少なく、文章全体が従順になだらかにできているからで、内容的にも面白く、趣味を辿って読んでいううちに英語の言い回しに慣れてきてイギリスの原作物を読み得るようになるという。そしてその順序は歴史ものが好きな場合

<sup>14</sup> もともと東雲(しのめ)堂書店が発行した土岐哀華(善磨)企画の雑誌『生活と芸術』第1号に掲載されたもの。東雲堂書店はもとは名古屋で絵入の滑稽諷刺雑誌『新浮世』(1889年1月～9月)を刊行していたが、その東京支店に奉公するうち、見込まれて養子となったのが西村陽吉である。文藝雑誌として、『青鞥』『番紅花』の奥付を見れば判然とするようにこれらの雑誌の販売を一手に引き受けていたのが東雲堂書店の西村であった。

はデュマからユーゴーへと、近代物が読みたい場合は、モーパッサンやドーデの短編から、ツルゲネフの短編へと、それからゴリキー、トルストイ、イブセンを挙げている。馬場自身、バルザックの翻訳「荒磯」を『太陽』に発表して後、ドーデ、ゴリキー、モーパッサン、チェーホフ、ゾラ、シェンキビッチといった作品を『明星』を中心に発表していた。

後年、山川菊栄から馬場にあてた1928年の書簡で、旧稿の自作翻訳を送付され「ツルゲネフの散文詩らしく存じます」と応える礼状<sup>15</sup>がある。前掲のドーデ作品と合わせて馬場のところで学んでいた修養期に英訳を練習したものだだったと考えられる。そしてこれによって、菊栄は恩師の馬場と同様に、「歴史物」より「近代物」を読み訳すことを選んだということになる。このドーデ作品のあと、人道主義の短編作家コロレンコの「マカールの夢」「盲楽師」を訳すのは、ゴリキーと同時期の文豪なので、その路線であったことがわかる。そして、つぎのカーペンター著「中性論(『番紅花』3-5号、1914年5月～7月)で欧州大陸の作家から英国の作家に切り替えて挑戦することになる。抄訳を依頼した神近市子に対して「抄訳をする位なら全訳したい」と意気込んだ菊栄が、途中から梗概訳となるのは、英語の独特の言い回しに慣れ切っていなかったためハードルが高かったのかもしれない。その後、アナトール・フランス作品を続けて訳していくのは、再び欧州本土の作家への回帰とみることができる。馬場の指導の中心は「大陸文学」であり、ゲオルグ・ブランデスの「アナトール・フランス」を読んでいたから、なじみのある作家の選択になったと考えられる。ちなみに馬場は日本のアナトール・フランスの異名をとるほど、一時期翻訳紹介に集中していたことがあった。

(2)なぜドーデ著『月曜物語』の2作品「少年間諜」「母の心」が訳されたのか

菊栄が選んだ短編2作品は先にみたように普仏戦争下の家族の悲劇を描く短編である。1890年に生まれた菊栄が5歳の時に日清戦争があり、また、10歳の時に義和団事件、15歳のときに日露戦争と5年おきにある戦争と出兵、そして戦勝歓喜のなかで、幼少期から思春期を過ごしていたことになる。兄や姉が博文館の雑誌『少年世界』にあふれる日清戦争の称揚記事とともに、従軍看護婦の物語にひかれたりする幼少期のことについて、

私の幼児からの記憶に残る印象は、家庭的なものとなひ合わされて、戦争のそれが実に多い。それほど明治以来、日本の国民はたえず戦争と縁の深い生活をしてきたものだった<sup>16</sup>。

そして10歳のときの義和団事件以降、戦死をめぐる家族の悲嘆を目のあたりにすることになる。

義和団事件(北清事変)(1900年)では、両親が育ての親となった、船橋尚が従軍先の天津でチフスに罹患し病死した<sup>17</sup>。そして、青山墓地にある祖母・鈴木きくや叔父の青山量一の墓参の折に、船橋家の墓にも訪ねるようになった<sup>18</sup>という。

船橋尚(しょう、尚義)について、『おんな二代の記』を手がかりにまとめてみると、菊栄の父・森田龍之助が陸軍の通訳職以来の上司であった船橋衛の庶子であった。船橋の千葉県令時代に龍之助は養豚から豚肉加工の技術指導をしていたが、周囲に反抗する子供として尚は龍之助と千世に預

<sup>15</sup> 1928(昭和3)年8月17日付書簡。小石川区水道端町2の18に居住する馬場から、神奈川県鎌倉郡稲村ヶ崎の菊栄あて。日本近代文学館蔵、『日本近代文学館年誌』12、2018年所収。

<sup>16</sup> 「戦争の思い出」『山川菊栄集 第6巻』(岩波書店、1982年、pp.154-162。『新装増補 山川菊栄評論集』第6巻)に収録の冒頭の文。初出は『家庭新聞』238-241号(1937年7月25日、7月30日、8月5日、8月10日号9)に4回にわたり連載された。なお、『家庭新聞』は新妻イトの編集発行で菊栄の記事がしばしば掲載されていた。戦後、新妻は労働省婦人少年局長となった菊栄のもとで婦人課長を務めた。

<sup>17</sup> 同前、p156。

<sup>18</sup> 以下、船橋尚についても同前及び『おんな二代の記』。

けられた。反抗の理由は本人にはなく、実は船橋の弟の婚外子を引き取ったことに起因していた。千世と龍之助との間に子供がなかなかできなかったこともあり、千世はことのほか、愛情を注いでこの男子を5年間育てて見違えるようになったという。23歳という若さの尚の死を聞いたとき、実子を失ったかのように、「あの子が死んでも心から泣くのは私一人だろう」と嘆く千世の姿を菊栄は記憶している。戦争がもたらす悲しみをまじかにみた最初であったと思われる。

日露戦争下では、東京府立第二高等女学校の2年にあがっていた菊栄は、近所の表札の「出征兵士」という表示の増え方や、顔なじみの人や同級生の家族の戦死の報に触れ、また、戦勝とともに催される提灯行列の見物に出かけたり、学校の奉仕活動で慰問ハガキや慰問袋の作成にあたっていた。<sup>19</sup>

その戦争に従軍していた千世の兄弟である森祇敬(まさとし、熊本藩出身、陸軍歩兵中佐)が奉天で戦死したのは1905(明治38)年3月8日のことだった。「森の叔父」は、読書家で読むものに飢えていた菊栄にとって、いわば文化資本の提供者であった。福澤諭吉の「新女大学」を与えられたり、新聞をとっておいてくれて、この家に立ち寄った日曜ごとに講談ものを読むようにしてくれた。定年を迎え退役して後備役(こうびえき)となっていた森は、1900(明治33)年に広島へ赴任するが、その折、蔵書を青山の家族に預けていった。そのなかに高価な予約書籍『万葉代匠記』や古美術集があり、教養を深める一助となった。菊栄はこの豪華な色刷り美術本を手がかりに帝国博物館に出向き、実際の美術作品も鑑賞しするようになったという。激戦のなかで全身蜂の巣のように打たれていたという壮絶な最期のようなすを伴った森の訃報は、初めての血縁者の死でもあり、さまざまな恩恵を受けていた菊栄がどのように受け止めたか想像にかたくない。

菊栄たち兄弟には、もう一人重要な文化資本の提供者がいた。それは、父方のまたいここにあたる小川卯太郎であった。松江から龍之助をたよって上京し居候のようになる親戚が多かったといい、夫の不在のなか、千世はその人々の面倒もよくみて親代わりを務めていたという。おそらくはその恩返しという意味もあったと思うが、読書家の小川は読後の雑誌を菊栄の兄や姉のために貸し与えたという。それは、のちに哲学会会報に発展していく『丁酉倫理』<sup>20</sup>や、当時の知識層対象に博文館が発行していた高級な総合雑誌『太陽』だった。菊栄は難解な評論は避け小説を読む程度だったというが、その理由は、ふりがなが小説欄にしかなかったからである。そのなかでも、トルストイのセバストポリに驚嘆したと『おんな二代の記』で書いている。

これは、『太陽』の1901年7月号(「セバストウポルの火花」、8月号(承前)と12月号(「セバストウポルの落城」)の三回にわたって掲載されている。トルストイの初期の名作とされる短編3部のうち、2番目の後半から3番目までを嗟峨の屋おむろ(矢崎鎮四郎)が訳したものだ。クリミア戦争で従軍した本人が目当たりした最激戦地セバストポリの戦場ルポであり、非人道的な戦争の惨禍の告発でもあった。千世が我が子のように嘆いた船橋尚の志から一年ほどたったのちに、こうした戦場の現実を告発的に描くトルストイの作品に、菊栄は「英雄物語ではない戦争、ただの人間同士の戦争が描かれていた」<sup>21</sup>と心に留めていたのである。年少期には日清戦争後の『少年世界』を通じて従軍看護婦にあこがれていた菊栄の大きな転換期であったととらえられる。

小川が読了後に森田の家族に貸し与えた雑誌をめぐる、兄と姉の間でかわされる政治や社会的議論を菊栄はただ聞くだけだったようだが、特に、姉・松栄は徹底的な非戦論者、人道主義者とし

<sup>19</sup> 同前・脚注15に同じ。

<sup>20</sup> 『丁酉倫理』とだけ『おんな二代の記』では誌名があげられているが、正しくは『丁酉倫理会講演録』であり、のちに哲学会に発展する。なお中心的な論客に「婦人問題」に理解を示していた桑木巖翼がいた。

<sup>21</sup> 山川菊栄「わが青春時代」、阿部知二、清水幾太郎 共編『女子学生ノート』所収(、新評論社、1953) .p298、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/3032401> (参照 2025-03-18)。

て、従弟の森秀雄(士官学校生徒)との議論に負けずに反戦主張を述べ、一步もひかなかった。菊栄は「姉のいうことの方がりっぱで理屈にあっていると思って内心誇りを感じていました」(『おんな二代の記』)と述懐している。

こうして家族の会話や読書の情報環境の中で着実に育てられていた、平和主義、人道主義の視点のうえに、馬場の指導のもとで、菊栄はドーデ著『月曜物語』から、「少年間諜」と「母の心」を選びとり、梗概訳をつくることができたのである。原題の「母」に「心」を付け加えたのは、繰り返される対外戦争のなかで母・千世の慟哭を間近にきいていたため、心情を強調する意味をもたせたものと考えられる。

## おわりに

本稿では、菊栄の既刊の著作目録では確認されていなかった、『明星』掲載の青山菊栄訳「月曜物語」からの短編2作品「少年間諜」と「母の心」の紹介とともに、その選択理由を探ってみた。馬場孤蝶による翻訳指導のもと、師と同じく「近代物」を訳していったはじめにあたる作品であることを示した。また、菊栄の幼少期から5年ごとの東アジア地域の戦乱のなかで、亡くなっていく近親者との別離がもたらす深い悲しみを感じ、また、トルストイの名作セバストーリの読書や姉の反戦主義や人道主義への共感が作品選択の背景にあったことを突き止めることができた。ただし、この作品が菊栄の公刊された最初の翻訳作品とは推定されるものの、断言することは避けておきたいと思う。

女子英学塾に入る前、この『明星』掲載の時期が4月号であることから、「外国語学校の夜学を志願するも女人禁制。やむを得ず津田の予科にはいったのが明治41年9月」(『おんな二代の記』)との関連を考えると、この作品が東京外国語学校の夜間部としてあった二か年の専修科の4月か9月入学<sup>22</sup>をねらったものだった可能性も考えられなくはない。英語の実力を『明星』で公示したうえ、受講学力の証明としたかったのではないだろうか。しかし、女子の入学は許されず、女子英学塾のあと東京帝国大学入学を志望するも女子は規程にないと、再び差別的な門扉の前に希望する勉学の路を閉ざされたのであった。

女子英学塾を出た菊栄に、その英語教師だったアナ・コープ・ハーツホン<sup>23</sup>が翻訳を依頼したのがリチャード・グレリング<sup>24</sup>著『大戦の審判』(原題、J'accuse, 丁未出版社、1917年)であった。ハーツホンは欧州でベストセラーになったドイツを糾弾するこの書を日本にも広めたいという希望をもっていったが、菊栄がそれに答えたのは、やはり平和主義の信念がすでにあっただからであろう。

その後の戦争とのかかわりでは、満州事変に対応した「満州の銃声」『婦人公論』をあげることができる。2024年の日仏会館100周年記念日仏シンポジウムで、元ジュネーブ大学教授のピエール＝フランソワ・スイリ氏が、「人種的偏見、性的偏見、階級的偏見」(『婦人公論』11月号、1931年)所収)のなかで菊栄が広い視野で人権をとらえられていたことは、同時代の女性でも稀有なものであったことを指摘された。この短いコラムのなかで「正義人道」ということばで、国内に残る差別問題への注視に喚起を促している作品である。

戦後、竹西寛子のインタビューに答えた菊栄は、「ものが豊かになるだけでなく、すべての人の教

<sup>22</sup> 苦学研究会 編『新苦学職業学校案内』, 弘文堂, 明44.5. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/812834> (参照 2025-04-01)。夜間学校のためのガイドブックである。

<sup>23</sup> Anna Cope Hartshorne(1860-1945)。鈴木裕子編「年譜」や伊藤セツ編「年譜」が「アナ・クララ・ハーツホン」とするのは誤りである。

<sup>24</sup> すでに「山川菊栄翻訳原典一覧」ベータ版1.0『山川菊栄記念会＊資料部情報』でも明らかにしているが、既刊の著作目録では「原著者不明」となっていた人物については、ドイツの法律家リチャード・グレリングが著者であることが判明している。

育程度が高くなって道德水準があがる、これが社会主義の理想です。人間をもっと人間らしく扱う、社会主義というのは最終的にはそういうことですね。それにはやっぱり戦争があってはだめです(略)」「(「人と軌跡:9人の女性に聴く」中央公論社、1970年)と平和主義を強調した。また、晩年の1978年にNHKの斎藤季夫アナウンサーから自宅で受けたインタビューの最後にも「いま一番重要なことは」と聞かれて、「軍縮、それもソ連の軍縮です」と現代を透徹することばを遺していた。

『明星』掲載の「月曜物語」は、菊栄が生涯貫いたといえる人道主義、平和主義の出発点に位置づけて読むことができる。